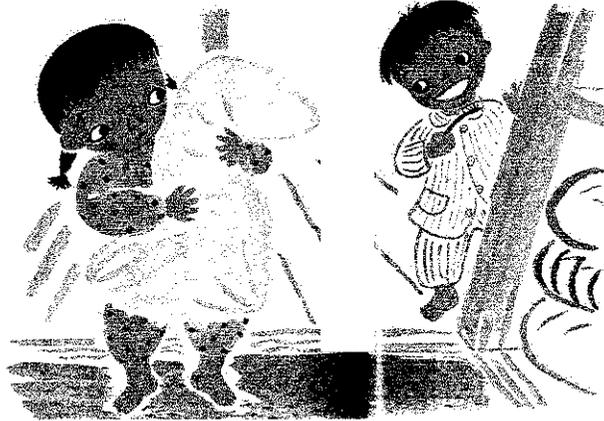


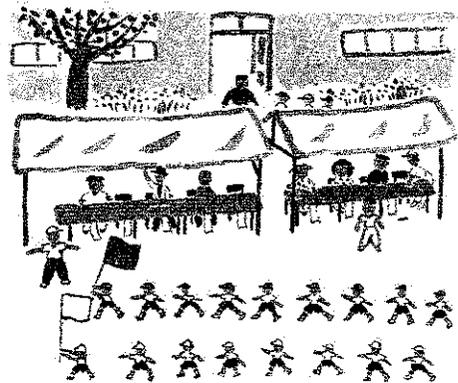
走れ

村中 季衣 文
渡辺 有一 絵

- ① 朝の日差しがベランダから差しこむ。のぶよは、のそのそと三人分のふとんをたたむ。今日は、春の運動会。足のおそいのぶよには、ゆううつな日だ。
「ね、ね、今日はお母ちゃん、ぼくが走るまでに来てくれるよね。」
- ② 齒みがきのとちゆうで、けんじが顔をのぞかせる。
「ん……たぶんね。」
- ③ のぶよは、お母ちゃんのしわしわのまくらを、パンツとはたいて、おし入れに放りこんだ。



- ④ のぶよたちのお母ちゃんは、駅前で、弁当の仕出し屋さんをしている。お父ちゃんがなくなつてから、お母ちゃんが一人でがんばっているお店だ。遠足や運動会など、行事のある日は大いそがして、朝まだ暗いうちから仕事に出かける。
- ⑤ 去年の運動会には、お母ちゃんの代わりに、お店の手伝いのおばさんがお昼の弁当をとけてくれた。一年生だったけんじは、とびきりの一等を走った後、お母ちゃんが来ていないことを知って、大ベそをかけた。まだ三年生だったのぶよは、けんじをなぐさめるのと、その後始まる、びりまちがいなしの自分の短きより走のことで、心の中がぐしょぐしょだった。思い出したくない思い出だ。



- ⑥ 「絶対に来るさ！きのうの夜、ちゃんと約束したもん！」けんじが、むきになって歯ブラシをふり回した。
- ⑦ パツ、パバツ、パーンと、空をつきやぶるように、花火があがった。
- ⑧ 明るい音楽といっしょに、プログラムはどんどん進んで、二年生の短きより走が始まった。のぶよは、けんじの走る番が来るぎりぎりまで、校門の所で待っていたが、お母ちゃんのバイクは見えなかった。
- ⑨ どうとう、けんじたちの番が来た。けんじは、保護者席をちらりと見た。が、すぐにまっすぐ前をにらんだ。そして、ピストルが鳴ったしゅん間、一気に飛び出した。
- ⑩ 二位の子を五メートルも引きはなして、けんじはテープを切った。
「けんじはもう走っちゃったかい？」
- ⑪ かけつけたお母ちゃんが、かたて息をしながらグラウンドをのぞきこんだときには、二年生の短きより走は終わっていた。
- ⑫ お昼休み、お母ちゃんは、二年生の席までけんじをむかえに行った。
「お姉ちゃんに聞いたよ。また一等だったんだって？やるなあ、けんじは。」
- ⑬ けんじは、下を向いて、返事をしない。
「店の人への仕事をたのんで出かけようとしたら、まとめて弁当の注文が入ったんだよ。三十個だからねえ。その代わり、ほうら。」
- ⑭ お母ちゃんは、むねをはって、くいつと、弁当包みをのぶよに手わたした。のぶよが包みを開くと、けんじがつぶやいた。
「え？これなの？」

約 ヤク

*むきになる

席 セキ

位 イ

*むねをはる

「これって？」

⑮ お母ちゃんが、笑いながら聞き返した。
「ぼく、今日は特製のお弁当作ってって、
言ったのに。」

「だから、見てごらんよ。このからあげ、
今日は、特上のもも肉ふんばつしたんだ
から。あつ焼きたまごだって、いつもの
三倍くらいあるよ。それにぎ……。」

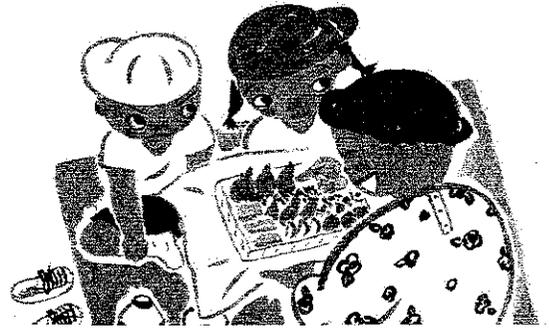
「こんなんじやいやだ。お店売ってるの
と同じじゃないか。」

⑯ お母ちゃんのえがおが消えた。

「もう行く。」

⑰ けんじが、だつと、かけだした。

10



⑱ のぶよがとまどっている間に、お母ちゃんは、だまって、おにぎりを食べ
始めた。何にも言わず、ゆっくり、ごはんつぶを飲みこんでいく。お母ちゃ
んのひざから、わりばしが二つ、かさりと落ちた。店の名前入りの見なれた
わりばし。その紙のふくろに、お母ちゃんのごちごちした文字で、一つずつ、
「けんじ、一等賞だ！」

「のぶよ、行け！」

と書かれていた。

⑲ のぶよは、わりばしを拾うと、ぎゅっと
にぎって、けんじを追いかけた。

⑳ けんじは、水飲み場の所で、水をがぶ飲
みしていた。

「けんじ。」

㉑ けんじが水できただらけの顔を上げた。



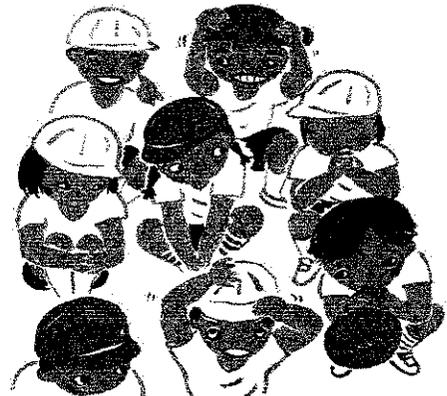
⑳ のぶよは、だまって、わりばしを見せた。
けんじは、しばらくその文字をにらんでいたが、ぼうしをぐっとかぶり直
すと、二年生の席へかけていった。

㉑ お昼ぬきて、午後の競技が始まった。

㉒ つな引きと、六年生のフォークダン
スが終わって、四年生の短きより走に
なった。一列スタートするたびに、ぱつ
とすなぼこりが上がる。次の列が、ざ
わざわと前進する。

(あと一列。)

㉓ のぶよの心ぞうの音が、だんだん高
くなる。



㉔ ザクツという音とすなぼこりの後、のぶよの目の前が急に広くなった。深
こきゆうして、体を前にたおす。頭の中が真っ白になっていく。

「ようい！」

㉕ 耳のおくて、かすかにピストルの音を聞いた。両わきからいちどきに風が
起こる。ひとつおかれて、のぶよも体を前におし出した。

(がんばって走らなきゃ。)

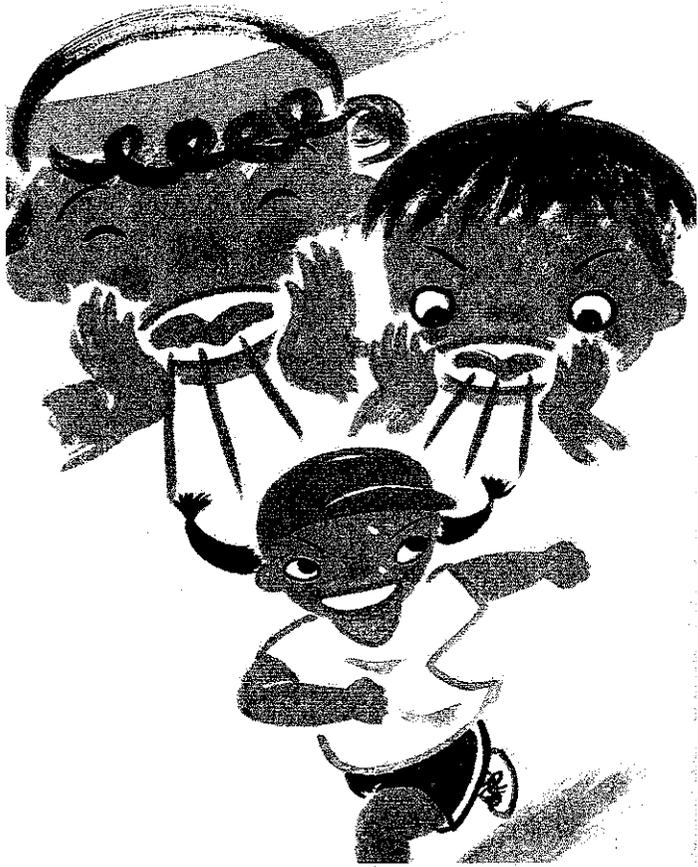
㉖ 体が重い。

(お母ちゃん、ショックだったろうな。でも、けんじもさみしくて……。わ
たしだって本当は……。)

㉗ 体がどんどん重くなる。一生けん命走ろうとすればするほど、体が後ろへ
下がっていく。

(あ、もう走れない。)

㉘ そのとき、ふいにせなかに、二つの声がかぶさった。



「姉ちゃん、行けっ！」

「のぶよ、行け！」

③② 思わず、ぎゅんと足が出た。

「走れ！ そのまんま、走れ！」

③③ おしりが、すわつと軽くなる。次のしゅん

間、体からみついていたいような思い

が、するするとほめていった。

③④ 走った。どこまでも走れる気がした。と

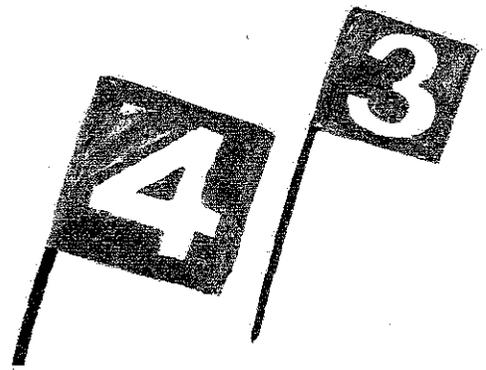
うめいな空気の中に、体ごと飛びこんだ。

「はい、君がラストね。」

③⑤ とつぜん、係の声が出た。

③⑥ 体の中は、まだ、どくどく波打って走り続けている感じがした。

③⑦ ラストという言葉が、こんなにはこらしく聞こえたことは、初めてだった。



③⑧ 退場門から出ると、けんじとお母ちゃんが立っていた。

「へたくそ。」

③⑨ けんじが、ぶくりとふくれたくちびるを動かして、おこったように言った。

そばで、お母ちゃんがにやっと笑った。

④① いきなり、けんじが走りだした。転がっている旗を

飛びこえ、だんボール箱を飛びこえ、走る。走る。

④② のぶよも、追いかけて走りだした。

「おなか、へったぞう。」

④③ けんじが、前を走りながら大きな声で言った。

「おなか、へったよう。」

④④ のぶよも、後ろから大きな声で言った。

④⑤ 二人は走った。走りながら笑った。笑いながら走り

続けた。

